

組織培養を利用したナナカマド切り枝の産地形成

生け花やフラワーアレンジメントで使われるナナカマドの切り枝は、春から冬までのそれぞれの季節に“芽吹き物”“花物”“紅葉物”“実物”と呼ばれて花き卸売市場で取り引きされます。ナナカマドの切り枝は山取りが主流であることから、花き卸売市場では将来の資源の枯渇や収穫従事者の高齢化と減少の不安から、高品質の切り枝を安定して生産する産地の形成が切望されていました。そこで、美唄市農業協同組合と林業試験場は、農地を活用した栽培収穫型の切り枝産地の形成を目指した共同研究(1998～2000年)に取り組みました。この課題では、花き生産者が切り枝として商品価値の高いナナカマド(写真-1)の選抜をおこない、林業試験場は組織培養を利用したクローンの増殖技術(写真-2)を開発しました。合計7個体の選抜個体がクローン増殖され、現在、農地で大きく成長したクローン(写真-3)から収穫される切り枝は、美唄ブランドとして北海道内外の花き卸売市場へ出荷されています(写真-4)。

(管理技術科)



写真-1 選抜したナナカマドのひとつ



写真-2 選抜個体のクローン増殖



写真-3 ピンク色の実をつけるクローン



写真-4 切り枝の出荷